

① 琉球方言内における敬語形式の分布状況

奄美方言の敬語形式には同じ北琉球方言に属する首里方言との共通性だけではなく、南琉球方言との共通性もみられる。同形式で分布しているものには謙讓表現が、異形式で分布しているものには尊敬表現や丁寧表現が多い。

② 北琉球方言と南琉球方言における丁寧表現の地域差

琉球方言の敬語の種類は尊敬・謙讓・丁寧の3つに分けられる地域が多い。特に、丁寧表現の形式には顕著な地域差がみられ、その出現位置により北琉球方言と南琉球方言に大別できる。北琉球方言の丁寧表現は動詞・形容詞・コピュラ語幹に後接する接辞として現れるが、南琉球方言の丁寧表現は文末表現として現れる。

以上の話題を中心としながら、各地域の特色を整理した。今後の課題としては、敬語形式のバリエーションと使用頻度との関係、意味だけではなく形態素からの分類・整理、各敬語形式の運用実態の解明があげられる。それらを明らかにすることで周辺方言との比較研究へ発展するための資料としたい。

〈第4部〉

Christian 〈キリスト教信者〉の自称と他称

——歴史社会地理言語学の方法による——

小川俊輔

【目的】 〈キリスト教信者〉を意味する語の、歴史的、社会的、地理的変遷過程を明らかにすること。

【方法】 以下の調査による。(1) フィールド調査：① 2003年から2005年にかけて九州地方300地点において実施した地理言語学的調査、② 2009年に長崎県・熊本県で実施したカトリック教会の神父と信者を対象とする質問調査、③ 2012年に南米のポリビア多民族国サンフアン日本人移住地で実施した長崎県出身のカトリック信者に対する文化人類学的調査。(2) 文献調査：①中世末期のキリシタン資料、②幕末明治期のプチジャン版（長崎で編纂・発行）、③近現代の各地のカトリック教会史・記念誌。

【結論】 ①カトリック信者が自らのことを〈キリスト教信者〉という場合、主に「シンジャ」という語が使われる。但し、長崎県の五島列島においては、非キリスト教信者も〈キリスト教信者〉のことを「シンジャ」と呼称する。この用法は、五島列島におけるキリシタン隆盛の歴史的・社会的背景から説明できる。②長崎・佐賀・熊本のカトリック信者の一部は、今も自らのことを「キリシタン」と呼ぶ（「シンジャ」と併用）。この語を使うカトリック信者は、自身を“先祖代々の信仰者である”と認識している。また、彼らは「クリスチャン」を〈プロテスタント信者〉の意味で使っている（意味の棲み分け）。他方、仏教徒はカトリック信者とプロテスタント信者とを区別していない。かつ

ては両者をまとめて「キリシタン」と言っていた。現在は「クリスチャン」と呼称するのが一般的である。③カトリック教会では、潜伏キリシタン（江戸時代のカクレキリシタン）を先祖に持つ信者のことを「キューシンジャ（旧信者）」、それ以外の信者のことを「シンシンジャ（新信者）」と呼ぶ伝統があった。この語は、主に布教者と旧信者の人々に使用された。「旧信者」という語の発生・使用の背景には“殉教・迫害を乗り越えて守り継いだ信仰（者）”に対する敬意、自覚、誇りがある。

心象文法論への試み

河原修一

こころのなかのおもいは、どのようにしてことばになるのか。心象（様々なおもいのあらわれるすがた、かたち）は（並列を含む）自在なひろがりであり、ことばは時間の経過に沿った直列的なくみたてであるから、その間に心的な変換がなければならない（可能性として、神経細胞接合部における神経細胞膜電位分布の写像が考えられる）。

文法は、こころに内在することばの枠組のくみたてかたである。論理や直感などでくみたてられる（〔何だ。〕は主客未分のまま直感的に瞬時にくみたてられる）。

発表者はかつて十代から八十代までの男女に、内言メモ（という外言）を依頼したことがある。内言メモには、その内言のあらわれた場（時、所、出来事など）も補助メモとして記して頂いた。

内言メモに示される心象の枠組とことばの枠組とは、一対一に対応しなかった。心象の枠組は、単発型、並列型、直列型、複合型、統合型、超越型など多岐にわたるが、内言メモの枠組は、単発型、直列型、象徴型であり、特に断続的直列型（飛石型）が多かった。単発型も直列型の始まり、象徴型も象徴やレトリックによる直列型と考えれば、内言メモから想定される内言の枠組も、外言の枠組と同様に、基本的に直列型である。

外界や内面のものごと、内面のおもいが心象としてあらわれる。心象文法への試みとして、外界への視点（聴点、嗅点…）、視線、視界（聴界、嗅界…）、対象に対応して、内面への内的視点、内的視線、心的世界（こころの世界）、（心像（心的イメージ）を含む）心象を想定する。こころの世界には、残像、印象、記憶、想像、夢などの世界がある。

内的視点による内観的表現（「こころがいたむ」「くるしむ」「つらい」）と外的視点による外観的表現（「ものがいたむ」「くるしがる」「かわいそうだ」）がある。

日本語の枠組は、心象のなかの印象的部分が順次あらわれてくる展開型であり、無意識に論理的な構造が想定されている。心情表現では、隠れた構造のうえに飛石型であらわれ（「だ」で状況が截り取られ）、論理表現では、構造があらわれる。

（発表要旨の表記等は発表者作成の原稿どおりである。）